

「聖武天皇と正倉院御物」

横 山 貞 裕

光島督教授は一九七三年四月から約半歳にわたって、アメリカ合衆国エール大学からの招聘をうけて、同大学が蒐蔵していた膨大なチベット語文献の整理・引得の作製にあたられた。このアメリカ滞在中に印刷にまわされて出来上がったのが本書である。

文学部長尾形裕康先生から本書の書評をかくようとお話を頂いたのは、筆者がその際の校正にあたったため故と推察するが、私は正倉院御物については、過去数回の展覧会の際に拝観したことがあるに過ぎない。しかし本書の校正の責にあたりながら、その任をよく果たせなかった点につき、著者ならびに読者各位に深くお詫びしなければならない立場にあるので、敢えてお引き受けした次第である。

さて、著者光島教授は、終戦直後の昭和二十一年に、戦争の激化のために中止されていた正倉院の調査が実施された際に、寧楽会という、奈良文化研究会の一員として、石田茂作博士をはじめ、梅原末治・尾上八郎・大野法道・中村直勝・西田直二郎ら諸先生が調査を行われた調査員の補助として、直接正倉院の中で、正倉院の御物にふれられる機会を持たれた。まことに貴重な体験を得られた。そしてこれを機縁として著者の専門とする仏教史の研究は、日本・中国・印度・チベットの仏教史の研究に進まれたのである。

著者はこれまで前後三回にわたって、チベット・ネパール・シッキムの各国に足を踏み入れられ、長きは滞在一年半にも及ぶ深い研究を行い、また時には

実際にかの地の僧院内で生活を共にし、現にわが国での権僧正に相当するところの「ハランバ」(Lha-Ran-Pa)というラマ教僧位を授与されて居り、僧服仏具まで所持されて、いわば、身を以て研究体得するという献身的な篤学者である。このように、仏教や正倉院の御物に造詣深い教授が、本学で行った講義を中心にまとめてめられたのが本書である。

本書の内容は十章から成り、正倉院御物の解説が主なる内容である。われわれには正倉院の御物が、如何なる状態に保存され、いかなる経過や変遷を経ているのか、北・中・南の三倉のどこにどの御物が格納されているかなど、全く知ることの出来ない点であるが、本書はそれらの点について、親しく御物の整理にあたられただけに、丁寧な解説が与えられて教えられるところが多い。なるべく著書の原文に即して紹介するのも忠実な一方法と考え、引用の印を一々しないで、内容の紹介を試みる点、御諒察をお願いしたい。

流石に直接整理に当られて、その都度メモを取っていた著者の説明だけに極めて有益である。そして仏教史的立場から種々論評を加えられているが、梵語やチベット語を解する立場からなされた解説は特に光っている。一例をあげれば、一九七二年に発表された中国の長沙漢墓馬王堆古墳の内棺をおおっていたあの美しい彩色帛は、中国によって、幡のごときものであると発表されて、我国でもこれを幡としているが、当時中国には仏教はまだ伝来されて居らず、仏教儀式に使用される幡は使用される筈がない。この彩色帛は、春秋左伝や後漢書礼儀志の条に記されているところの、檜または旛、天子の場合これを牙檜と称するものと思われるが、本書の中には、幡について原名を梵語の「パータカ」という法要の時などに、重要な場所に掛けられた「はた」の一種であるという説明をされている。わが国では、旗を「はた」と称するのは、おそらく、この梵語そのままの音の訛った「はた」と称するものであろうが、旗は中国音

は「キ」であって「はた」の音はないところから、梵語の「パータカ」がわが国で「はた」と称されたものであると。このように、今日国語の中に、仏教関係の輸入舶来語はかなり多いはずである。禪定・袈裟・瑜珈・于闐盆などもその一例であるが、本書のいたるところに梵語の原名をあげて解説されている。伎楽面に、金剛・迦楼羅・毘留・力士・波羅門の五種類の名がある。この迦楼羅の名称について、現在でもチベット・ネパールに於ては、「ガルダ」と呼ばれる信仰の対象とされている霊鳥があり、蒙古やチベットに於ては、この霊鳥にまつわる多くの伝説が語りつがれて居る。迦楼羅は、この半人半獣的な怪異な面相についての呼称であるが、その印度語源、即ち梵語にもとづくことを明らかにされている。

第一章では、聖徳太子と聖武天皇の仏教尊崇について、殊に聖武天皇が大仏建立の大事業を遂行された点につき、天皇は大仏を通じて法の妙音に合一し、地上の現実には悠久のいや栄えを招来せんと祈願されたとし、聖武天皇の法即政事の建設に、永劫にして常に新しい摩天楼を見ることが出来ると述べられている。聖徳太子と聖武天皇との間には、一世紀におよぶ時の流れがあったが、共に仏教興隆につくされた功業のいかに偉大なることか。聖武天皇は文武天皇の首皇子である。この両天皇は奇しくも七才にして父君に死別するという不運にあわれた。聖武天皇の大仏建立や仏教尊崇の事業の裏に、まぶたの父への思慕がなかつたろうか。こうした心情についていまだ少し掘り下げて欲しかった。

第二章は聖武天皇崩御七七忌に、光明皇太后が御遺愛品六百数十点を東大寺に献納されたときの願文と目録を詳述されている。

第三章では、その後の、「天平勝宝八年七月二十六日献物帳一卷」、「天平宝字二年六月一日献物帳一卷」、「天平宝字三年十月一日献物帳一卷」と、数回にわたる追加献納にふれ、それらの献納品の格納の別についてのべ、鍵眼に貼った三・五・一〇の極の小紙片の勅封の故にこそ正倉院の宝庫が今日まで護られ

て来たとしている。昭和三十七年からは空調の西宝庫が完成し、千数百年来の珍宝がここに移され保管されるにいたった事情をのべている。ただし、この間に、仲麻呂の乱に際し持出された武具類、或は正倉院入蔵後六十四年にして失われた王羲之の書法二十卷、弘仁十一年十月三日出蔵の「東瀛珠光」、弘仁五年九月七日に「山水尽屏風一具」以下三十二帳の失われた屏風など、さらに後嵯峨天皇の御即位儀式に使用されて、返還の際の取扱者の不注意からばらばらに壊われた聖武天皇御使用の王冠などや、義政や信長による蘭奢待の切り取りにもふれている。

正倉院御物の古文書は実に六百六十七巻にもおよぶ龐大なもので、中には戸籍、封戸文書がある。殊に御野国大宝二年戸籍断簡一巻などは当時の大家族制度の一般を伺うことが出来る史料で加毛郡半布里の戸籍断簡には秦人という身分の戸の如何に多いことか。筆者の推計では半布里の戸籍には、県造三、県主二、県主族十五と県主関係にも三系があり、秦人は二十二、秦人部二で合計五十七戸のうち、実に秦人は最も大きい氏であり、その人口を合計すれば実に四二三人の多数に達する。その他秦人の戸以外に嫁している秦人十二人があり、これを合すると実に四五〇人という多数にのぼり、秦人以外の者の合計四五三人に比して殆んど同数であり、換言すればこの半布里の半数は秦人という里が存在したのである。欽明元年紀の秦人の戸七〇五三戸の記事などもあり、正倉院古文書は、古代史殊に日本民族の究明の上にも極めて貴重なものであるだけに、現在国の所有に帰した文化庁保管の戸籍断簡にもふれて頂きたかった。

第四章は主として屏風を中心として述べた章である。「鳥毛立女屏風六扇」を中心として詳細に述べられ、「鳥毛帖成文書屏風六扇」・「鳥毛篆書屏風六扇」・「花鳥密陀絵盆」・「麻布菩薩図」・「麻布山水図」・「戯画大大論」、また献物帳に記載のない「鳥毛帖成文屏風」と「鳥毛篆書屏風」についてもふれて居られる。

第五章は楽器論である。冒頭に白楽天の有名な琵琶引の詩を掲げている。本書にはいたるところ唐詩漢文を引用しているが、印刷に際して、前後に一行の余白をとっているのは、難解な文章に柔らかみを与え極めてよい感触を感じさせる。琵琶・琴・阮咸・箏篋・鼓胴・尺八について興味深い解説を試みている。正倉院には、金銀平文とか金銀平脱と名のつく御物が極めて多いが、古来、平文と平脱との手法について異説がある。著者は、平文とは金銀の薄片を華文に切つてそれを漆地に埋めて共面を研出した手法をいうという解説を与えているが、平脱については説明を与えていない。両者は全く同じものか或は何らかの手法上の相異があったものであろうか。金箔と金箔との差などについても解説を聞かせて欲しかった。

第六章に於て、正倉院御物伎楽百六十四面、皇室所有の三十一面、その他の二十七面計二二三面の中で、圧倒的に多い正倉院伎楽面が大仏開眼供養の式典に使用されたものであることを明らかにし、正倉院のものとは皇室所有のものとの間に著しい相違があつて、正倉院のものには誇張的な感じ、即ち道化役者としての表情に乏しいことを指摘している。皇室所蔵のものは舶来のものであり、日本製である正倉院のものとの間に、このような差が認められるのは、大仏開眼供養という宗教的使命に拘束された結果と見る著者の見解は蓋し妥当なものである。そして、その製作者が東大寺の教理蓮華藏世界の哲学的雰囲気の中での純潔の精進の訓練を受けた人々の手になったと推論している。第七章は鏡論。第八章は聖武天皇の遺品中の小物についてのべ、特に光明皇后の施入目録に、金浅香一材重大三十四斤とあるものを蘭奢待かも知れぬとし、義政・信長・明治天皇が正倉院を訪れた際に、その一片を切り取ったが、名香は千年を貫いてその芳郁を失わないと述べて、正倉院御物の香気をこれになぞらえてゐる。

第九章は御物の中に使用された多くの玉についてのべ、ばらばらの玉が大きく

な長持箱に一杯残されていると記している。

第十章では、「木画紫檀双六局」「木画紫檀碁局」「金銀亀甲龜」「金銅獅子形五脚白石火舎」「漆胡瓶」「瑪瑙坏」などにつき、その背景の国際性豊かな点につき論じている。

最後の結論の部では、献物帳の聖武天皇の遺愛品の類別を試みられている。

国宝・翰苑と上杉家蔵国宝・宋版史記・前漢書・後漢書は現在、中国に残存せず、我国に伝わる世界の唯一品であるが、正倉院には校倉造りという他に例のない建築物があり、さらにそこに収蔵された諸種の珍宝はわが国の世界に誇るべきものである。光島教授の本書はそれを明らかに示してくれている。ただ図版写真版の一つもないのは惜しまれる次第である。（本学助教授・東洋史学）

「聖武天皇と正倉院御物」（A5版 一〇頁 七五〇円・成文堂刊）